

## 講演要旨\*

### 貝類の水平分布からみた東京湾の沿岸水と黒潮の与える影響について

石山 尚珍\* 大山 桂\*\*

外洋から東京湾へ流入する暖流は海洋学上では反時計廻りの流路をとるとされているが、海況や気象現象などに支配されて変化することも認められている。

現生貝類の分布から生物群の示す意義を調査することによって、黒潮の小枝が湾内に与える影響をみいだすために、幕張から富崎へかけて千葉県側に10点を選んで現生種貝類を調べた。

各種類の南限・北限を統計すると、外洋から湾内へ向かうに従って種類が減少し、また熱帯的要素をもつものと調査地点における種類との比は、南部で1:2、北部では1:20ほどの相違がみられた。

なお、横軸に緯度を、縦軸に種類をとり、各調査地点の現生貝類に関する生息範囲をグラフに描いてみると、沿岸水要素と外洋要素との影響や生息環境による違いがうかがわれ、湾北部では沿岸水要素の影響が著しいのに反して、南部では外洋要素が強く影響を及ぼしていることが表現された。

これらのことが化石調査に対してどの程度まで関連づけられるかが、今後の課題となる。(燃料部 \*\*地質部)

棲種も多いが、汽水種が圧倒的に多い。*Corbicula*, *Microcoblita*, *Geloina*, *Cyclina*, *Brachidontes ogasawarai*, *Pitar sannosawaensis* が最も顕著である。南部では終始砂の堆積があり、*Ostrea-Brachidontes Sakakurai-Geloina* 群集 (“*Siphonalia*”, *Pyrazas* を伴う) が優勢であった。古空知潟の化石群集はいわゆる紅樹林沼沢群集に比較できる。なお、大部分の地域で初期には炭層堆積(茂尻夾炭層)があった。一方、古夕張湾(層序が空知地区と全く違うことは前から知られている)では化石相は古空知潟と全く異なる。砂泥部ともに純海棲種に富み、汽水種としては *Ostrea* が縁辺部および最下部に含まれるにすぎない。

赤平層を中心とする層序学の問題 空知地区北東・北西両部の石狩層群上部層の層序関係について、筆者は大瀬・小笠原(1959)の見解に同意する。北東部では赤平層から高根層にかけて、淡→汽→海→汽→淡という環境変化を示し、それに伴って、化石群集も変化する。北西部の相当層の層序・岩相は北東部と異なるが、注意してみればやはり同様な環境変化がみられる。そして、全体として南部ほど陸相を示している。これらで示される層相変化の問題についても述べた。以上の問題と関連し、夕張地区の幾春別層の層序学的位置が問題となる。石狩層群上部層の標準層序としては、空知地区北東部の層序(清水・田中・今井, 1953)を用いるのが望ましいと考える。(地質部)

### 北海道中央部の古第三系石狩層群についての2, 3の問題

水野 篤行

貝類化石研究との関連で次の諸点を論じた。

若鍋層の堆積環境 若鍋層には、浅海・汽水・淡水各種を含む約40種の貝化石が含まれる。層相解析の結果、堆積域として、古空知潟・古夕張湾を識別した。古空知潟は石狩炭田の空知地区と留萌炭田とを含む広大な閉ざされた湾で、mud flat のような環境が優勢であった。海

### 岩石の剪断面角

星野 一男

剪断面角とは Angle of Shear (Joints) のことである。剪断面角についての主要論文(下表)を紹介し、地質構造を解釈するときに重要な数値であることの意味を説明した。

研究者	Rock	剪断面角 ( $2\theta$ )	文献
Wager 1931	Great Scar Lms. (York, England)	90°(?)	Quat. Jour. Geol. Soc. London, Vol. 87, p. 392~424
Parker 1942	Compact Shale, Palaeozoic (New York, U.S.A.)	19°	Bull. Geol. Soc. Amer., Vol. 53, p. 381~408
Pincus 1951	Pre-C Gn, Sed. Rocks (New Jersey, U.S.A.)	30° 60~90°	Bull. Geol. Soc. Amer., Vol. 62, p. 81~129
村井 1955	安山岩類 緑色凝灰岩層 凝灰岩・頁岩互層 浮石質砂岩層	55° 32° 30° 50°	震研彙報 Vol. 33, p. 121~149
Spencer 1959	Granitic Gn, Migmatite, (Rocky Mts, U.S.A.)	30~40°	Bull. Geol. Soc. Amer., Vol. 70, p. 467~508 (燃料部)

\* 月例研究発表会講演要旨, 昭和35年12月12日, 本所(川崎市久本)にて開催

常磐炭田の物理探査について

市川 金徳 川島 威

31年度以来、物理探査部で行なってきた常磐南部の地震探査が、ある程度まとまってきたので、報告する。この調査は、常磐炭砒 K.K. の受託として行なわれ、北磯原地区・中郷地区・植田地区の3地区に分けて実施された。北磯原地区は、将来の採炭計画立案のために、炭層と関連の深い基盤の形状を明らかにする目的で行なわれ、多くの試錐資料を併用して、基盤面の地下等深線図を

作成した。中郷地区は、多くの断層の走る断層地帯であり、その確認を目的として調査が行なわれた。地表および坑内で確認された断層と、地震探鉱で推定した断層との関連を考察し、推定断層線図を作成した。

植田地区は、基盤の形状調査を目的とした概査であり、地震地下断面図は作成したが基盤面地下等深線図を作成するまでには至らなかった。

なおこの調査地の弾性波速度分布は、次の表に示すとおりである。  
(物理探査部)

	中郷地区	北磯原地区	植田地区
第1層 (多賀層群)	1700~1900	1900~2050	1850~1950
第2層 (湯長谷層群) (白水層群)	1900~2250	2000~2200	2000~2250
第3層 (石城夾炭層)	2600~2700	2850~2900	2800~2900
第4層 (基 盤)	4500~5200	5000~5050	5000~5200

第21回万国地質会議報告

斎藤 正次

演旨省略

(地質部)